

「教育臨床総合研究 特別号」

面接道場の現状と課題

Circumstances and Requirements in Interview Training “Mensetsu Doujou”

林 正 久*
Masahisa HAYASHI

要 旨

教師力向上プログラムの一環として始められた面接道場の現状を見つめ、今後の課題や改善策を模索する。学外の評価委員からは面接道場に対して、概ね好意的な評価を受けている。委員による感想・見解の違いも大きかったが、面接時間の増減、事前指導の在り方など有益な提言を得ることができた。また、面接を受けた学生側からも「進路を考える良い機会になった」「教育実習仲間の協調性が高まった」という好評価を得られている。

〔キーワード〕 面接道場, 自己表現, 集団討論, 教育活動評価委員

I はじめに

今年度は島根大学教育学部が教員養成に特化する学部へ改組して10年目にあたる。それに伴って、様々な教育改善への取り組みが行われてきた。『面接道場— 教師力向上プロジェクト—』もその一つである。「面接道場」とは、学外の有識者から構成される本学部の学部教育活動評価委員（外部評価委員）^(注1)が、学校教育実習Ⅳ〔いわゆる本実習（附属学校での4週間の教壇実習）〕を目前に控えた学生を対象として面接を行ない、指導と助言を与えるもので、外部の目を通して、教育学部学生に対する期待や要望を学ぶ機会として企画された。平成17年度～18年度の教員養成GPの一環として、教育学部附属FD戦略センターが中心となって平成18年度から始められた。GP期間終了後も、学部の重要な教育活動の一つとして、継続してきている。

本稿では、これまでに実施された8回の面接道場の歴史を振り返り、実施状況や成果について報告するとともに、改善に向けての課題を検討してみたい。

II 面接道場の教育課程上の位置づけ

面接道場は、学部教育活動評価委員という、いわば「働くことのプロ」の方々と出会うなかで、「社会人としての基本的な資質を身につけ、子どもの前に立つうえで必要な『教師力』の一層の向上」を目指すもので、個々の学生にとっては教職に向かう自己の課題を、また学部教員にとっては学部の教育活動の課題を整理し、授業改善に生かそうというものである。もちろん、学生が実際に就職する際の予行演習的な側面をも含めていることは言うまでもない。

表1に教育学部における教育実習系授業と面接道場の学年配当・時間数の関連を示します。

* 島根大学教育学部共生社会教育講座（附属FD戦略センター兼任）

表1 島根大学教育学部における教育実習系授業の配当期・時間数と面接道場の関係

配当学年・学期／科目	1年		2年		3年			4年	
	前期	後期	前期	後期	前期		後期	前期	後期
学校教育実践研究Ⅰ	30	教育実習Ⅰ・Ⅱの事前・事後指導							
学校教育実習Ⅰ	20	附属学校園での観察実習（子供・学校理解）							
学校教育実習Ⅱ			20		附属学校園での観察実習（教科理解）				
学校教育実践研究Ⅱ	教育実習Ⅲ・Ⅳの事前事後指導				30				
学校教育実習Ⅲ	附属学校園での参加主体の実習				40				
面接道場					●				
学校教育実習Ⅳ	附属学校園での教壇実習主体の教科別実習					160			
学校教育実習Ⅴ	異校種の学校教育実習（校種は選択制）					40			
学校教育実習Ⅵ	学校教育実習（深化型または副免許型）							40	

網掛け数字：時間数。学校教育実践研究Ⅰ／Ⅱ：コア授業科目。その他の科目は実習系科目
3年後期は実習セメスターに設定されており、通常の定期授業を履修することはできない。

面接道場は3年次の夏休み期間、ちょうど前期の学校教育実習Ⅲと後期の学校教育実習Ⅳの間の時期に実施される。この時期に設定されたのは、附属学校園の教壇に立って実際に教鞭をとらなければならない約一か月間の学校教育実習Ⅳ（通称、本実習）を前にして、個々の学生が、これまでの授業や体験学習で得られた知識・技能・経験などを総括し、本実習へいかに取り組むか、どのような準備をしておくべきかといった、自己の振り返りと教育実習への新たな決意・覚悟をする時期にあたりと考えられるからである。

教育課程上の「面接道場」は卒業単位としての必修科目ではない。しかし、3年生の全員参加を原則として、指導をしてきている。ただし、学校教育実習Ⅲ・Ⅳを履修するためには、2年次終了時まで所定の単位を取得しておく必要がある。したがって、この必要条件を充たしていない学生は、学校教育実習Ⅳを受講することができず、面接道場への参加もできないことになる。この要件に抵触する学生は数名ではあるが毎年存在し、翌年以降に面接道場に参加することになる。また、やむを得ず欠席した学生に対しては、面接道場と同形式で学部教員を面接委員とした補講をおこなった年次もある。

Ⅲ 面接道場の実情

面接道場の実施状況とその内容について見てみたい。表2は面接道場の実施状況を年次別に示したものである。

1. 実施日程と実施場所

面接道場は夏休みの前半、7月の下旬、あるいは8月の初旬に実施してきている。当初は2日間、近年は1日の日程で行なっている。

面接道場の会場は、学生に緊張感を持たせる、外部評価委員のアクセス等を考慮して、主として学外の公的施設で実施してきた。学部内で実施した年度は、予約が取れなかったり、施設が改修工事などで利用できないという事情によるものである。

2. 実施体制と事前指導

面接道場の企画・運営は教育学部附属FD戦略センターの授業改善・外部評価部門が担当し、具体的な実施計画の策定、各種の連絡調整や折衝、配布資料の作成にあたる。また、実施にあたっては、FD戦略センターの兼任教員、約20名の全面的な協力を得てきた。面接道場当日の面接委員は、学部教育活動評価委員に委嘱している。司会進行はFD戦略センター兼任教員が担当する。また、ボランティア学生（3年生以外の学部学生）を募集し、面接道場当日の学生の誘導、カメラ・ビデオ撮影などに協力してもらっている。

表2 面接道場の年次別実施状況

年次	実施日	会場	面接委員	部屋数	回数	学生数 (欠席)	事前 指導日	個人 表現	集団 討論	P F シート	参観 教員
H18年	8月2日 (水)	松江市 市民活動 センター	13名	4	3	183	7月28日 (金)	3分 計40	40分	配布	附属 教員
	8月4日 (金)		15名	4	3						
H19年	8月2日 (木)	生物資源 学部棟	12名	4	3	165 (3)	7月27日 (金)	3分 計50	40分	配布	附属/ 学部
	8月3日 (金)		15名	4	3						
H20年	7月31日 (木)	教育 学棟 教 部	14名	4	3	179 (2)	7月25日 (金)	2分 計40	50分	配布	附属/ 学部 教員
	8月1日 (金)		16名	5	2						
H21年	7月30日 (木)A	島根県民 会 館	8名	3	4	175 (5)	7月24日 (金)	3分 計40	50分	配布	附属/ 学部 教員
	7月30日 (木)B		11名	4	3						
H22年	7月29日 (木)	島根県民 会 館	12名	4	4	166 (2)	7月23日 (金)	3分 計30	30分	配布	附属/ 学部 教員
	7月30日 (金)		10名	4	4						
H23年	8月9日 (火)	島根県民 会 館	16名	7	4	171 (10)	7月22日 (金)	2分 計30	30分	無	附属/ 学部 教員
H24年	8月8日 (水)	教育学部 棟	15名	7	4	170 (5)	7月20日 (金)	2分 計30	30分	無	学部 教員
H25年	8月7日 (水)	島根県民 会 館	14名	7	4	163 (8)	7月19日 (金)	2分 計30	30分	無	学部 教員

学生数は対象学生総数。欠席数は内数

P Fシート：プロフィールシート^(注2)

学生への事前指導は面接道場の1～2週間前に行なっている。事前指導では、日程やクラス配当など一般的な注意事項に加え、実際の面接に準じた模擬演習を行なっている。あらかじめ依頼しておいた3年生数名が教壇に上がり、自己表現（セルフ・プレゼンテーション）と集団討論（グループ・ディスカッション）を行なうもので、模擬演習とはいえ、厳しい質疑もあり、かなり本番に近いものである。表3に事前指導の進行プログラムを挙げる。

本番までの期間に、リハーサルを行なう学生たちもいるという。

3. 面接の次第と面接内容

附属学校での実習クラスの配当は学校教育実習Ⅲですでに決定しているため、面接道場の学生の室別配当はそれに準じて行なっている。一つの面接室に、学生は5名を目安とした（実際には最少で4名、最多で9名）。面接委員は2～3名、司会進行役が1名という形になる。1回あたりの面接時間は80～90分、休憩をはさんで学生が入れ替わり、ほぼ同じ形式で面接が反復される。面接委員は引き続き同じ部屋で面接を繰り返すことになる。

当初は附属学校の配当クラスの担当教員が観察・助言者として参加していたが、平成24年度からは参加していない。助言者としてすべきことが明確ではなかった、事前の打ち合わせ不足、附属教員の多忙化などが理由に挙げられる。また、平成19年度からはFDセンター関連以外の学部教員がオブザーバーとして面接に立ち会えるようになった。講座やゼミに所属する学生の面接の様子を観察したいという学部教員の要望をうけて実現したものである。ただし、教員の参加数はあまり多くなく、毎年数名にとどまっている。

面接は二部構成となっている。配当学生全員が一斉に入室・着席後、前半の自己表現（セルフ・プレゼンテーション）が始まる。2年半の大学生活を振り返りながら、教育実習を目前に控えた現在の心境を一人2～3分で述べる。面接委員は配布された学生個々人のプロフィール

表3 対象学生への事前指導の内容

- | |
|--|
| <p>(1) 面接道場の実施にあたって
面接道場の意義、心構え・内容等の簡単な紹介</p> <p>(2) 自己表現（セルフ・プレゼンテーション）演習
あらかじめ指名されていた学生（4～5人）による模擬演習（一人2分）
→質疑応答を行い、その後に服装・態度などの指導</p> <p>(3) 集団討論（グループ・ディスカッション）演習
あらかじめ指名されていた学生（4～5人）による模擬ディスカッション（10分程度）
→質疑応答を行い、その後に態度・表現法についての指導</p> <p>(4) おわりに
諸注意、確認等→当日の服装、持物、緊急連絡先等</p> <p>(5) 配当学級別に分かれて学生・教員の打ち合わせ（進行役の選出等）
* 当日の模擬面接官は学部の教員3名があたる。
* 指名した学生たちには、集団討論のテーマを前もって教えてある。</p> |
|--|

表4 自己表現（セルフ・プレゼンテーション）の内容の指導例（H.25年）

自己表現（セルフ・プレゼンテーション）は「自己の課題の明確化を促すもので、その内容としては以下のようなことが考えられます。ただし、すべての事柄を羅列的に述べる必要はありません。的を絞って自分の課題・意見を要領よくまとめて下さい。

- ・これまでの2年半の大学生活を振り返り、具体的な例を挙げて自己分析を行ないます。
 - * 大学での授業，附属での実習，教育体験活動^(注3)，サークルや友人との関わりなどから，得られたもの，悩んだこと，感銘を受けたこと，浮かび上がった課題など。
- ・自分の考える教師のイメージとはどのようなものか。それに近づくため自分はどのような努力をしてきたのか（していくつもりか）。
- ・将来の進路に対して自分はどのように考えているのか。教師としてあるいは一社会人として目指すもの，克服すべき課題は何か，「迷い」はないのか。
- ・教育実習Ⅳに対する具体的な抱負や課題はあるか。自分の特徴（得意・不得意）を踏まえて考える。

シートを手元で見ながら学生への質疑や助言などを行なう。自己表現の内容例として、事前指導の場で表4のような指導を行なっている。

後半の集団討論（グループ・ディスカッション）では、面接委員から与えられたテーマ（課題）について、配当学級の仲間として、協力して問題解決の方法を議論するもので、集団討論を終えた後、質疑応答や委員からの全体への講評が行われる。進行役の担当学生はあらかじめ話し合いで決めることにしている。討論のテーマは面接委員が作成するよう依頼しており、面接当日までに各委員から提出されたテーマを回収・整理し、当日の面接の場で初めて学生に公表される。学生が入れ替わる班毎にテーマを変えて出題した面接室もあった。

集団討論で出題されたテーマのいくつかを表5に挙げる。テーマは面接委員が実際に経験した事例に基づいて作成される場合が多く、学級経営や生徒指導、不登校の問題、保護者との係わり方、課外活動の指導など直接学校に関わるもののほか、イベントの企画運営、地域の活性化や地域社会との連携模索などもテーマとなっていることが多い。面接後の講評では、「実際には、このように解決した」など結果や顛末などが披露されたこともある。併せて、学生の議論の進め方、内容についての批評も行われる。時間に余裕があった場合には、面接委員が個々の学生との自由討論を実施している例もあった。

学生との面接が終了すると、面接委員は学部教員・附属教員を交えて、面接室毎に懇談会を実施し、様々な意見交換や問題点の指摘、提言などが行われる。また、当日に言及できなかった問題点については、FAXや郵便で後日送られてくることになっている。

なお、プロフィールシートは面接前に学生個人の特徴を把握してもらうために面接委員や附属教員等にコピーを手渡して、利用してもらっていたが、「難解で理解するのに時間がかかる」「すべてを読んでいる時間的余裕がない」などの批判を受けたこと、GPA得点（履修単位の成績を数値化したもの）を一緒に記載する成績表の側面を持たせるようになったため、個人情報保護への配慮などから、H23年度から配布をやめた。

表5 集団討論（グループ・ディスカッション）の出題テーマの事例（抜粋）

- ・学校5日制によって生ずる課題とそれへの対応について論じなさい。（H20年）
- ・教育実習に行った時に、子供から、教えた内容が間違っていると指摘された。どのような対応をすべきか。（H22年）
- ・あなたがえこひいきをしていると子供たちから聞いた、と同僚から言われた場合、あなたはどうか対処しますか。（H22年）
- ・小学生の一人が5年の3学期から不登校になった。6年生になってからも一度も登校していない。この子と、その親とに伝えたいメッセージと家庭訪問での留意点を考えて下さい。（H21年）
- ・自分の親しいと思っていた友人が、インターネットの掲示板へ、自分の悪口を書いていることを知り、不登校になった生徒がいる。担任の教師としてどのように接したらよいか。（H20年）
- ・保護者から宿題が多いとの苦情があった場合、担任としてどう対処するか。（H19年）
- ・車椅子を使用するという障害をもった生徒が中学校に入学することになった。どのような配慮が必要なのか。（H19年）
- ・小学校の制服指定についてどう考えるか。またその是非について考えなさい。（H19年）
- ・クラスの子どもが学校内で生まれたての猫を拾ってきました。担任としてどのように対応するかを考えて下さい。（H23年）
- ・個人情報保護の観点から、学級の児童の電話連絡網が作成・利用できなくなった。学校から児童への緊急連絡がある場合、どのような方法で伝えれば良いだろうか。（H21年）
- ・運動部の合宿で生徒がけがをした場合の対応を論じて下さい。（H20年）
- ・同じ部活なのに練習量が多すぎるという保護者と、もっと練習量を多くしてほしいという異なる要望があった。この保護者たちの苦情と要望にどのように対応していきますか。（H21年）
- ・万引きした児童に対して、店としてどう対応するかを論じて下さい。（H20年）
- ・中学校へ運動会の音について住民からクレームが来た。どのように対処するか。（H23年）
- ・ファッション業界の人になったつもりで、来年春の流行色を決めて下さい。（H23年）
- ・あなたが勤めている図書館の利用率をあげるためにどんな工夫をしますか。（H23年）
- ・毎年、中学生が地域に出かけて、空き缶の回収ボランティアを行っているが、最近は回収率が悪くなってきている。できるだけ多くの空き缶を回収するための工夫を考えて下さい。（H22年）
- ・シャッター通りとなった商店街の一角に、築50年の元銀行だった大きなビルがある。商店街に賑やかさを取り戻すために、このビルを活用するプロジェクト案を策定しなさい。（H22年）
- ・社会部配属の一年生新聞記者、ニートの特集をやることになり、①現在の社会状況をどう整理し②それをどう分析するか③どのような結論に持って行くか、企画案を考えて下さい。（H20年）

末尾の数字は年次。内容は一部を要約して表記した。

4. 教育活動評価委員からの評価と批評

懇談会等では面接道場への様々な感想や意見が出された。委員により、あるいは年度により正反対の評価も見られるので、それらをまとめることは困難であった。懇談会や兼任教員の報告書などで指摘された問題点や提言を中心に要約してみる。

最初に前半の自己表現についてのコメントを見てみると、「学生の成長を感じる」「年々発表能力の向上を感じる」「体験学修の幅広さを感じた」「教員になりたい学生が着実に増えてきている感がある」といった好意的な評価も得られている一方、多くの問題点も指摘された。表6に自己表現時に対して指摘された問題点を挙げる。表現内容だけでなく、態度や表情についての指摘も多い。これまでに与えられた意見を反映して、現在までに改善されたのは、「一人の発表時間を2分に短縮したこと」「メモ類の持ち込みは許可しないこと」「自己表現の具体的な事例を事前指導時に提示したこと」である。

表6 自己表現についてのコメント (抜粋)

「眼力を感じない」「笑顔が少ない」「情熱をもって、心を込めて話してほしい」
 「相手の顔を見て話せない」「原稿やメモは見ないで話してほしい」
 「プレゼンが同じ型にはまっている傾向がある」「使用単語が似通っている」
 「具体的なエピソードに乏しい」「めりはりが乏しい」「話が散漫でまとまりがない」
 「教育体験活動について話す学生が多いが、まるで部活の報告のようであった」
 「まじめでおとなしいがインパクトに乏しい」「目的意識の薄い学生がいる」
 「専門教科に自信のないという学生の存在に驚いた」
 「学生による個人差(班による雰囲気の違い)が大きい」
 「準備不足と心構えの不足が見て取れた。この日のためにどれだけ準備をしていたのか」
 「教育体験活動や大学の授業以外のことで打ち込んでいることを話す学生が少ない」
 「教育体験活動の時間数の少ない学生と多い学生との間に歴然とした差を感じた」

表7 集団討論に対するコメント (抜粋)

「答えづらいテーマもあり、発言が少なかった」
 「発言はするが、議論はしない学生の存在が心配」
 「結論を出すような方向で議論を進めがちであった」
 「逆のつっこみや厳しい指摘・反論がない」
 「パターン化しているのではないか。もっと荒削りで雑でもいいから本音を話すべき」
 「テーマは大学側で考えて、事前に提示してほしい」
 「15分ではディスカッションにはなりにくいので、もう少し長いほうがよい」
 「集団討論の方式を普段の授業にどんどん取り入れるべきである」

集団討論については、「司会進行の仕切りがうまい」「すばらしいディスカッションでよかった」と好感を表す委員もいたが、多くの批判・提言もいただいた。表7にその一部を載せる。面接道場全般についての批評や提案もいくつか挙げられた。その一部を表8に示す。

5. 面接された学生からの意見

面接を受けた学生からも面接終了後に意見を聴取している。開始初年度は、自由記載方式であったため、意見がバラバラでまとめるのが困難であった。そうした反省を踏まえて、WEB上で入力できる「コメントシート」と称する定形フォームを考案し、統計処理が効率的にできるようにした。表9に質問項目を挙げる。

表8 面接道場全般への批評・提言

「学生と面接委員との対話の時間が十分にはとれなかった」「フリートークの時間を設けてはどうか」
 「1対1の個人面接の機会を設けられないか」「発声法や表現法の訓練も必要ではないか」
 「学生の専攻に応じて設問を替えてもよいのではないか」「全体として、幅広い知識や経験が少ない」
 「撮影されていたビデオを、学生も事後に見られるとよいのでは」
 「面接のクラス分けは、実習クラスで固定せず、混ぜてはよいのではないか」
 「面接道場をオープンキャンパスのような場で開催し、訪問した高校生・高校教員に見せてはいかが」
 「面接道場への参加を、全員必須ではなく、希望制にして、場合によっては受講料をとってはどうか」
 「学生にどこまで強く言っても大丈夫か、どの程度の課題を出すべきなのか、わからなかった」
 「学生側から実習などについて、評価委員に自由に質問できる仕組みがあってもいい」
 「教育体験活動に民間での経験をもっと加えていくようなプログラムが有効だと思う」
 「自主性が薄く、やらされているという感じの学生がいた。教育学部のように至れり尽くせりの丁寧な指導では、学生が頼りきってしまうのではないかと不安である」
 「教育学部在学中に読むべき本100冊示す、といった試みもよいのではないか」
 「教員採用試験に携わる者（採用側）が、こうした面接道場に協力しても問題はないのだろうか」

表9 学生のコメントシートでの質問項目

- 問1 限られた時間の中で、相手に伝わる言葉で自分自身をプレゼンテーションできたか
 問2 教育学部で学んでいることの意義を、自分なりに再確認する機会となったか
 問3 自分の得意分野や苦手分野について、客観的な視線で自己分析する機会となったか
 問4 教育実習を目前に控え、自己の課題となることを整理する機会となったか
 問5 将来の進路選択や今後の自分自身を振り返る機会となったか
 問6 社会人としての自覚を高める機会となったか
 問7 同じグループのメンバーの発言から学ぶことがあったか
 問8 グループディスカッションでは、他のメンバーと協力して議論することができたか
 問9 配当学級のメンバーのチームワークを育む機会となったか
 問10 面接委員からの質疑・助言等に対して適切に受け答えすることができたか

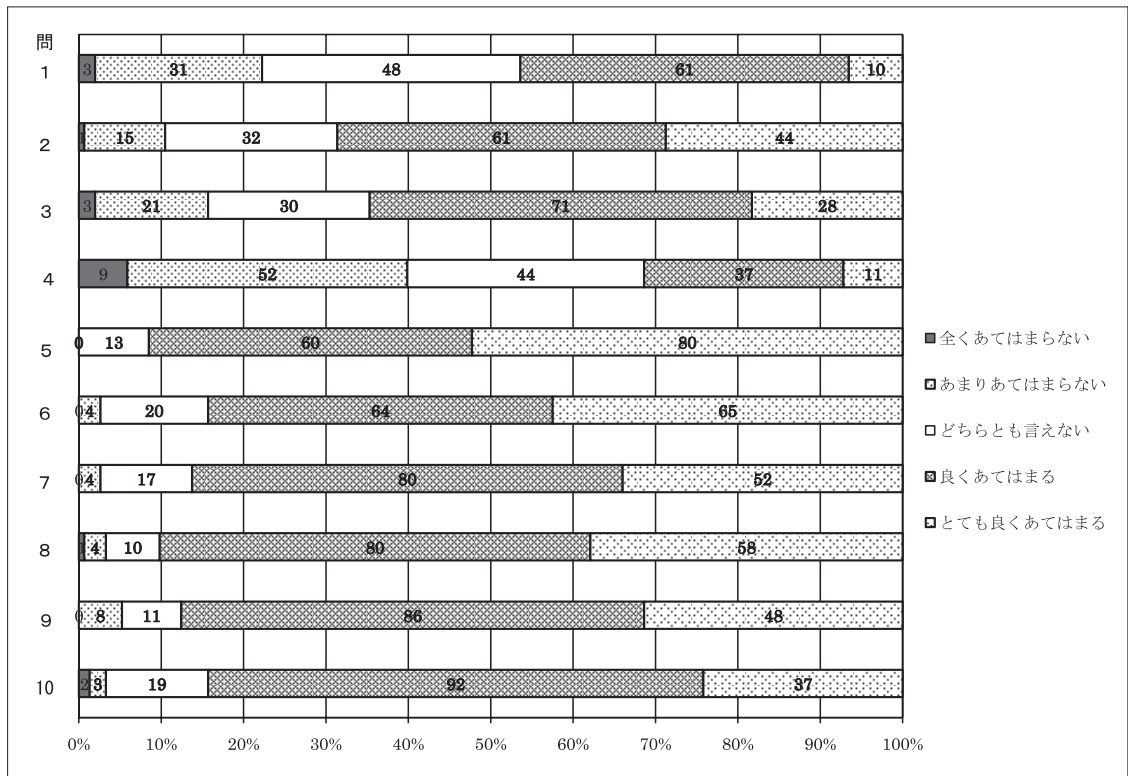


図1 学生へのコメントシートの集計結果（H25年実施分）

学生のコメントシートの回答結果を集計したものを図1に示す。80%以上の学生が「良くあてはまる」か「あてはまる」と回答したのは問5～問10で、将来の進路選択や自己の振り返りの機会、教育実習のクラス仲間との協力関係を築く機会としては効果があったといえる。問1～問4までは「あてはまらない」と回答する者がやや多く、プレゼンテーション能力（面接スキル）の向上や教育実習への決意・覚悟という視点からは、期待したほど十分な成果は上がっていないように見受けられる。ここでは平成25年度実施分を取り上げたが、他の年次の結果もよく似た傾向となっている。

面接道場が企画された当初は、個々の学生について「9月の教育実習を履修することの可否を審査・判定する」という位置づけも考えられていたようで、面接試験・口頭試問という側面も想定されていた。しかし、評価委員に可否の判断をゆだねるには責任が重すぎるということから、「緩やかな教育的指導」という考え方が前面に出されるようになった。その結果、事前指導においても、面接「試験・試問」ではなく「教育的指導」という側面が強調されるようになった。「教育実習への決意・覚悟」について良い機会にならなかったと回答した学生が40%近く存在したことの背景の一つであろう。

Ⅲ 今後の検討課題

面接委員や学生からのコメントから今後検討すべき課題について、大学・学部・附属の現状を念頭におきながら考えてみる。

日程や面接時間の増減、個人面接の実施などについては多様な要望がだされたが、大学の夏休みの短縮化（授業日数の15回分確保）による影響が大きい。現在のように夏休み開催を基本とするならば、日程のひっ迫化から逃れることはできない。日程の分散化を図る、あるいは面接委員（教育活動評価委員）数の追加などを検討していかなければならない。学生の部屋別配当については、教育実習を間近に控えた時期を設定している限り変更は難しい。

面接スキルの向上については、提言が割れている。事前指導でテーマを絞って丁寧に説明すべきという意見がある一方、マニュアルによる画一化を避けよという反論もあり、判断が難しい。複数のテーマを考え学生番号別に振り分けるという方法、あるいは年毎にテーマを替えてみるという手法も試みる必要がある。また、自己表現の素材となっている教育体験活動に、学校・部活以外の職種を含めることによって、話題の多様化が促せるかもしれない。

事後のビデオ観察、オープンキャンパスの活用など、新たな提案については、実現の可能性を検討していく必要があるであろう。

IV まとめ

面接委員や学生のコメントだけから今後の方向性を定めることは簡単ではないが、将来像を設定できていない学生の存在やコミュニケーション力不足という批判については、真摯に受け止める必要がある。また、学生に対してだけでなく、この時期に、面接道場を行うことが、学生の教師力の向上にとってどのような意義を持つかについて、大学教員・附属教員側も改めて共有する必要があるという指摘も重要であろう。

附属学校・園も含め、法人化以降の人的資源の不足、多忙化による準備・検討時間の不足という困難さはあるが、結局、面接道場の声を体験活動や教育実習、大学での授業などに反映していくことが肝要といえる。

注1) 教育活動評価委員：学部の外部評価を行なってもらうために委嘱した学外の委員。鳥根県や鳥取県内の教育委員会、校長など教育関係の他、社会教育関係やメディア・マスコミ関係、NPO関連、民間企業の代表者などに委嘱している。委員の数は15～18名、任期は2年である。

注2) プロファイルシート：鳥根大学教育学部が開発した『教師力学修カルテ』作成システムで「学校理解、学習者理解、教科基礎知識・技能、授業実践、リーダーシップ・協力、社会参加、コミュニケーション、探究力、教師像・倫理、リテラシー」の10項目について、様々な指標を設け、学生が自己評価していくもので、学年終了毎に定期的に作成・蓄積される。さらに、それらを概観しながら指導教員が学生毎にコメントを書き込んでおり、教育上貴重な資料となっている。現在は、履修した科目の単位を指標毎に点数換算したのもも記載されるようになり、学生の自己成長過程や学修成果の記録となっている。

注3) 教育体験活動：教育学部では卒業までに1000時間の教育体験活動を義務付けている。内訳は基礎体験領域110時間、学校教育体験領域340時間、臨床・カウンセリング体験領域150時間を必修とし、選択の400時間の体験活動を加えて1000時間となる。基礎体験領域では、附属以外の幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校での学校体験、課外活動の支援、行政連携事業への協力、社会教育施設での体験、各種団体での体験、就業体験など様々な分野から学生一人一人が選択して学修していく。